civi note 33

しびのーと

高松市美術館
ボランティア通信
2016年11月15日発行

誌上ギャラリートーク

展覧会のみどころ！

奇才・ダリ版画展　2016年11月12日～12月18日

「6歳のとき、私はナポレオンになりたかったが、果たせなかった。15歳のときに私はダリになりたかったので、ダリになった」(『ダリ・私の50の秘伝』サルバドール・ダリ著、音土知花訳、マール社、2009年)と、1947年、当時47歳のダリは、自著の中でこう語っています。自信に満ちた表情で、独特の口髭を指でなぞる姿が皆さんの脳裏にも浮かぶのではないでしょうか。

シュルレアリスムを代表する奇才、サルバドール・ダリ(1904～89)は絵画だけでなく、版画、彫刻、オブジェ、舞台美術、宝石や広告のデザイン、映画、文筆と広い分野で才能を発揮しました。本展はダリの版画に焦点をあて、生涯に制作した1,600点以上もの版画の中から、200点に及ぶ版画をご紹介するものです。絵画作品でよく知られる「やわらかい時計」「変形した肉体」などダリ独特のイメージは版画作品においても展開され、また、ダリが手掛けた文学の挿絵は、どんなふうに彼が物語を読み解いたのか、謎解きをする、魅力的な機会を私たちに与えてくれます。この晩秋は、魅惑のダリ・ワールドにどうぞおいでください。　［高木由貴子］

第４期常設展・版画の技法ーピカソ、マティス、カンディンスキーからウォーホルまでー
2016年10月26日～12月25日

アンリ・マティス《ジャズ》より「イカロス」1947年 高松市美術館蔵

「奇才・ダリ版画展」の開催にあわせ、常設展示室ではダリと同時代に活躍した欧米作家による版画作品を紹介しています。ここでは、そのなかからアンリ・マティス(1869～1954)の《ジャズ》を紹介します。

マティスは1941年72歳の時に大手術をして以降、ベッドの上でも制作可能な切り紙絵を油彩に代わる自身の主たる制作手法として精力的に取り組み、鮮やかに彩られた有機的形態が空間の中に軽やかに展開する魅力的な作品の数々を生み出しました。《ジャズ》は20点の図版とマティス直筆のテキストからなる挿絵本で、晩年における輝かしい切り紙絵の世界の出発点ともいえる仕事です。

図版のモチーフはサーカスや過去の思い出に関するもので、タイトルにある「ジャズ」を題材にしたものはありません。色彩どうしの激しい響きや、紙をはさみで切っていく際の即興的な感覚がジャズ音楽に通じることから「ジャズ」の題が付けられました。

「イカロス」はギリシャ神話のイカロスの物語―蝋でできた翼で幽閉された塔からの脱出に成功するも、高く飛びすぎたために太陽の熱で蝋が溶け、墜落した―に題材をとっています。星々がきらめく天空からイカルスが落下する様子が、黒いシルエットのヒトガタのまわりに火花のような形を配したシンプルかつ緊張感にあふれた構図により表現されています。ある評論家はこのイカロスの姿に「不眠に悩まされ、病気や心配事からの逃避を求めた画家自身」の姿が重ねあわされていると解釈しました。実際、《ジャズ》制作当時、マティスが住んでいたフランスはドイツと戦争をしており、レジスタンス(抵抗)運動に身を投じた彼の妻と娘がナチスによって投獄されたことをマティスは大いに心配していました。悩みや心配事のない享楽的な世界を描き続けたように見えるマティスにあって、本作は心配事や不安が投影されたレアな作例と言えます。　［高木市美術館　牧野裕二］

アンリ・マティス《ジャズ》より「イカロス」
1947年 高松市美術館蔵

復活！わき役のひとりごと　第6回

ヴィンセント・ヴァン・ゴッホ《包帯をしてパイプをくわえた自画像》1889年 個人蔵

いくらなんでも、剃刀でご自身の耳まで切り落とさなくてもよかったのではないですか？

確かにあなた様は、ゴーギャン様とアルルで共同生活をし、ユートピアを築こうと楽しみに準備されてきました。でも、ゴーギャン様は、違っていたようでございますね。芸術観も。あなた様に対する思いも。だからといって、その行為は激しすぎます。でも、あなた様のそのような激しいところが、作品に出ているのでしょう。筆のタッチにも、色彩にも。

あなた様が亡くなった後、お描きになったものは、大変な人気でございます。ほら、あなた様が、憧れていらっしゃった東洋の国、ジャポン。そこで約100年後、今あなた様が着てらっしゃるのと同じ服装したアーティストが、セルフポートレイトの作品を発表いたしました！(森村泰昌《肖像(ヴァン・ゴッホ)》1985年 高松市美術館蔵)

まぁ、私がいくらお慰めしても、今のあなた様には、聞く耳はございません。早く良くなって、私をあなた様の頭から取って下さいませ。わき役とは言え、白い包帯は目立ちすぎておりますから。

［鈴木典子］

新人さん、いらっしゃい！

こんにちは！
４月から高松市美術館で
お世話になってます！

どうぞよろしく
お願いします！

おがた　えりこ
尾形絵里子と申します。私は岡山出身で、京都の大学・大学院で西洋美術史を学んだ後、高松市美術館にやってきました。幼い頃より、テレビで高松のニュースに触れておりましたので、私にとって高松は身近な存在でした。実際に来てからは、美味しい海の幸山の幸を食べ、穏やかで暖かい皆様に良くしていただき、今ではすっかり高松が好きになりました！大学ではフランス絵画を専門とし、１９世紀後半に活躍したピュヴィス・ド・シャヴァンヌを研究しておりました。高松市美術館の素晴らしいコレクションである現代アートや讃岐漆芸にはまだまだ初心者ですが、一人前の学芸員として活躍できるよう精一杯頑張りたいと思います！

［高松市美術館 尾形絵里子］

たちばな　みき
橘 美貴と申します。出身は兵庫県神戸市で、大学ではベルギーの近代画家であるジェームズ・アンソールを研究していました。学生時代は神戸市立博物館や神戸市立小磯記念美術館でお世話になり、昨年度は兵庫県立美術館にありました。高松には何度か旅行で来たことがあっただけで、まだまだ街のことは知らないことだらけ。今は香川県を舞台としたアニメを見て勉強中です。こちらに来た最初の頃は、はじめてのことに戸惑いもありましたが、高松の方々の温かさに支えていただきながら、頑張っております。これからも精進してまいります！　［高松市美術館 橘美貴］

編集後記

◎瀬戸芸の秋会期で賑わう粟島。その小さな島にある不思議な郵便局が「漂流郵便局」です。宛て先不明の手紙が集まるこの郵便局は、懐かしさを感じさせる空間です。伝えられない…ありがとうやごめんなさいが綴られた手紙に引き込まれ、切なく不思議な時間でした。　［佐々木真理子］

◎高松市美術館が、リニューアルオープンして、半年あまりがたちました。絨毯から木材に変わり、今風で明るくステキです。リニューアル前の、グレーの絨毯、ギャラリートークで、随分歩きました。あなたのフワッとした感触、ずっと忘れませんよ。　［鈴木典子］

◎ノーベル文学賞がまさかのボブ・ディラン。本棚から「憶速」展の図録を引っ張り出し、段ボール製のボブ・ディラン像と久しぶりに対峙。斜に構えたいかにもな佇まいに、作者大竹さんの表現力のすごさを感じました。　［高木由貴子］

◎4月からcivi の一員になりました。ワークショップアシスタント、ギャラリートークに「しびのーと」の原稿など、とても刺激的な半年でした。これからどうぞよろしくお願いいたします。　［谷口史子］

◎天地がひっくり返る結果となったアメリカ大統領選。「分断」のある、先行き不安な時代にあって、想像力を要とするアートの重要性はますます高まるのだと思います。　［高松市美術館学芸員 牧野裕二］

〒760-0027 香川県高松市紺屋町10－4　Tel：087-823-1711　Fax: 087-851-7250
発行：高松市美術館　編集：civi ＆ 牧野裕二（高松市美術館）デザイン：福田千恵（高松市美術館）

高松市美術館
TAKAMATSU ART MUSEUM

写真でたどる 改修工事とリニューアルオープン

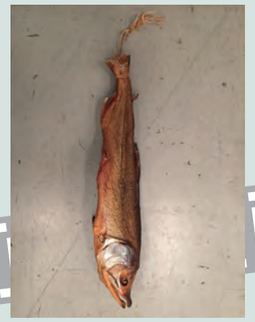
高松市美術館は2015年1月～翌年3月、大規模な改修工事を行い、2016年3月26日リニューアルオープンしました。
ここでは工事からオープンまでを、小ネタも交えながら、写真と共に足早に振り返ることにします。［高松市美術館 牧野裕二］

改修工事中に、エントランスの**《ナガレバチ》の周りに集められた大型彫刻**、ソファなど。落下物やほこりに備え、このあともう一重巨大な建屋で覆われました。

謎の木箱。じつはロダン《オルフェ》を撤去した後、石の台座を保護するため木箱を被せたもの。照明もばっちりで、中から何か飛び出すような予感！？

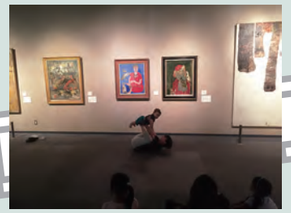
マグリットの絵に出てきそうな不思議な風景。中には2階展示室に至るスロープの上でみなさまを出迎える佐藤忠良《バレエの女》。台座が固定されていたため、この場所で梱包。→

←収蔵庫も工事があるので、作品はすべて展示室に移動。**「あるじ」達のいない空の収蔵庫**。



由一の鮭、ではありません！
正体は大掃除中になぜか事務室から発掘された鮭の燻製。絵画教室のモチーフと推定されます。その時の発見者の驚きの叫び声は、いまだに耳から離れません…

展示室は床・壁・天井すべてリニューアル。写真は建築部材むき出しの展示室でLED照明の確認をしているところ。工事現場は騒音が激しく埃だらけの過酷な場所ですが、廃墟のような現場では、独特の素材感や光の効果によりハッとさせられる美しい風景と出会うことも。



↑工事に伴う1年余りの休館中には、市内文化施設で4つの「おでかけコレクション展」を開催。写真は関連イベントのyummy danceワークショップの一コマ。展示室で、参加者に作品から着想した「ダンス」を披露してもらいました。

→建物周囲の**工事フェンス**には「おでかけコレクション展」出品作品の紹介パネルを設置。

オープン記念コレクション展展示風景の一コマ。**やなぎみわ作品は幅7m超**あるので、壁に吊るすときは大人数で。

←リニューアルオープン前夜祭**「石田尚志映像パフォーマンス」**。自身の展示のために来ていた藤本由紀夫さんも「音」で参加。パフォーマーそれぞれの静かでバラバラな所作が生み出すスリリングな「出来事」に引き込まれました。

3月26日朝、美術館正面に設置されたT、A、Mの文字をかたどったシンボルモニュメントの除幕式と共に、美術館リニューアルオープン。Tの布がなかなか外れないというプチハプニング！

←リニューアルオープン記念コレクション展では、精選した**日本の現代美術約110点を紹介**。当館コレクションの主役《電気服》ももちろん登場！同展出品作品の図版・解説、マンガによる各時代の美術潮流の解説、豪華執筆陣によるコラムなど内容満載の書籍『いま知りたい、私たちの現代アート』（青幻舎）、好評発売中。

→1階に新設移転した図書コーナーでは、藤本由紀夫・杉山知子両氏によるインスタレーション**「四次元の読書Ⅱ」**を開催。両氏の作品と藤本氏セレクトによる書籍が配された空間で五感による読書を楽しむという趣向。ワークショップでは、「書籍」としてのクッキーとケーキで味覚による読書体験！

↗金沢健一氏による**「音のかけらパフォーマンス」**。リニューアルを記念して他にも、千住真理子ヴァイオリンコンサート、柿崎麻莉子ダンス公演、山下裕二×山口晃対談など多彩なイベントが開催され、美術館の新たな門出を祝福してくれました。

civi主な活動 2016.3月-9月

5/28 こども+（プラス）イベント
「オランダ帽子を作ろう！」
（講師：翻訳家/作家・野坂悦子氏）

アシスタント

7/16～9/4
特別展「ヤノベケンジ シネマタイズ」

ギャラリートーク

エントランスホールに入ると、黄色い防護服を着た、高さが6mもある少年の像が目に飛び込んできます。《サン・チャイルド》は、東日本大震災と福島の原発事故からの東北の復興を願い、ヤノベさんが2011年に制作した作品です。ヘルメットを脱いだ少年の顔には傷が付いていますが、胸に付いた放射線量カウンターの数値はゼロで、私たちに明るい未来を示してくれます。

ヤノベさんはチェルノブイリに放射線感知服《アトムスーツ》を着て降り立ち、そこで感じたことをもとにさまざまな大型機械彫刻を作っています。私はヤノベさんのお話を伺ううちに、芸術で何ができるかを真摯に考えながら制作に向き合っていらっしゃる姿勢に強く魅かれるようになりました。そして、ヤノベさんの作品の根底にある社会へのメッセージや被災された方々への思いやりの気持ちを少しでも伝えられればという思いで、ギャラリートークに挑みました。

［谷口史子］

《サン・チャイルド》の前で
（右から：林海象氏、ヤノベケンジ氏、永瀬正敏氏）

8/6
「美術館の日」

アシスタント

8月の第1土曜日は、高松市美術館・高松市塩江美術館の「美術館の日」です。両館で観覧料が無料になる他、コンサートやワークショップなどが開催されました。高松市美術館では、特別展「ヤノベケンジ シネマタイズ」を観て、「鑑賞カード」に作品を観た時の気持ちを金色・銀色のシールを貼って示してもらいました。シールを貼り終えたら、「ゴール」で仕上げの版画を刷ります。子どもたちは版画に興味津々、年配の方からは「懐かしい！」という声も聞こえました。また、ヤノベケンジさんの作品を模した「なりきり帽子」や「太陽のコマ」の紙工作は、小さな子どもたちに大人気。とても賑やかな一日でした！　［福田千恵］

3/26 ワークショップ
「四次元の読書会」
（講師：藤本由紀夫氏、杉山知子氏）

アシスタント

ある日、美術館の牧野さんから「リニューアルした美術館の図書コーナーにて五感を用いた読書体験をするので、文字を刻印したクッキーを焼いてもらえませんか？」との依頼。？？？という感じでしたが、素人の私でよければ、とクッキーづくりに励むことにしました。刻印する文字が読めることに気をつけながら、美味しいクッキーを目指し、試作を重ねました。

ワークショップ当日、図書コーナーは〈読書〉をテーマにしたインスタレーション空間。見て、聴いて、触って読書を楽しむという新しい発見。作品の美しさ、そして展示空間の心地よさにうっとりしながら、今度は場所を移動して味覚で味わう読書へ。美味しいケーキとクッキーと紅茶を頂きながらの鑑賞？読書？ケーキの飾りやクッキーの刻印の言葉も作品と繋がっていて全てで1つのワークショップ、心いっぱいお腹いっぱいの時間でした。　［田中えり子］

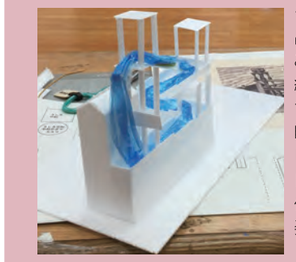
4/23～5/29
特別展「オランダ・エッシャー財団所蔵 エッシャーの世界」

ギャラリートーク

トロンプルイエ（だまし絵）の画家として、親しまれている20世紀、オランダの版画家、エッシャー（1898～1972）の展覧会。「よっしゃー、ギャラリートークは、おまかせ！」と言いたいところだったのですが、作品解説に出てくる言葉は、「平面の正則分割」、「多面体」、「結晶学」などなど説明するのが難しそうな単語がズラ～リ。数学や理科の教科書に出てくる単語とあって、少々 怯んでしまいました。しかし、展覧会場で、作品を前にすると、その不安はすぐに和らぎました。モノトーンによる不思議な図像は私たちの想像を掻き立て、まるで遠い国を旅しているかのような気持ちにさせてくれます。メルヘン的といってもいい、そのめくるめく世界にすっかり魅了されてしまいました。ちなみに、子どもの頃のエッシャーは、数学が苦手だったそうですよ。意外ですね。

［鈴木典子］

5/5 ワークショップ
「立体トリックアートに挑戦！エッシャーの錯覚をつくる？」
（講師：彫刻家・南正邦氏）

アシスタント

エッシャーは現実ではありえない遠近法を使って不思議な「だまし絵」を描く画家です。今回子ども達が挑戦したのは、下に向かって流れるはずの水が上に循環して、延々と滝の水が落ち続けるというエッシャーの《滝》という絵を、三次元の立体で作ってみようという試みです。講師の南先生が考えてくださった設計図をもとに、子ども達は建物や水路のパーツを組み立てていきました。そして、水に見立てた青いテープを取り付けて、完成させた作品を上下左右に視点を動かしてみてみると、ある1点だけ、エッシャーの絵が再現される目の位置があるのです。子ども達がその1点を見つけた瞬間のはっとした驚きと喜びの混じった表情がとても素敵でした。当日はこどもの日で、子どもと一緒に作業をするお父さんのほほえましい姿も見られました。　［谷口史子］